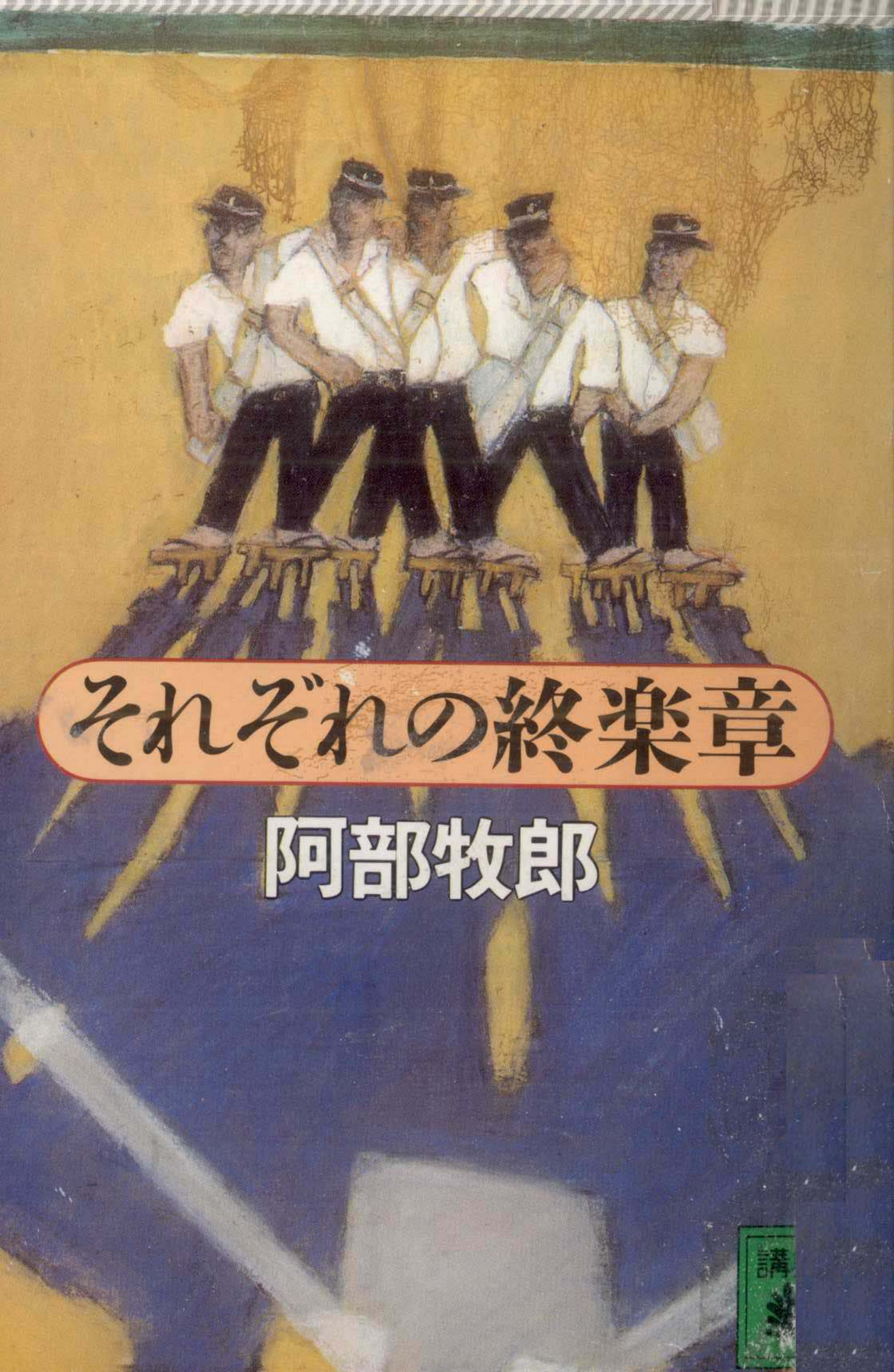
それぞれの終楽章
阿部牧郎
講

それぞれの終楽章(しゅうがくしょう)
阿部牧郎(あべまきお)
© Makio Abe 1991

1991年1月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01
電話 東京(03)3945-1111(大代表)
Printed in Japan

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国印刷株式会社
製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。 (庫)

ISBN4-06-184827-5

講談社文庫

それぞれの終楽章

阿部牧郎

目次

第一章　三楽章まで　7
第二章　北の野手たち　60
第三章　波の墓標　113
第四章　星空の走路　165
解説　常盤新平　215

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

それぞれの終楽章

第一章　三楽章まで

1

夜の九時だった。屋根のあるあかるいホームが、六月のやわらかな闇のなかにうかんでいた。同じ列車からおりた人々がわき目もふらずに跨線橋の階段へ吸いよせられてゆく。ラッパのような警笛のあと、列車が動きだした。追いぬかれながら矢部宏は歩をはこんだ。跨線橋をわたり、改札口を通った。

奥羽本線の〇駅へおり立った人々は三十名ばかりである。特急列車の利用客はむかしよりずっと少なくなっている。改札口のそばの上り線ホームには、普通列車を待つ数人の男女の姿があった。街であそんでいた人々なのだろう。

駅の建物はくすんでいた。切符売り場や手荷物受付の窓とカウンターの淡いグリーンの塗料が白っぽく古びている。人影のないベンチや戸をしめた売店やひからびたコンクリートの床面を、蛍光灯が疲れきったあかりで照らしていた。すみに嘔吐のあとがあった。

矢部は鼻で空気を吸った。むかし駅にあった石炭と機械油の匂い、魚と野菜の匂いをさがしていた。なにも感じなかった。駅ビルのなかはスーパーマーケットの売り場のように無味無臭である。過去にあったさまざまな別離や再会、出発や到着のなごりまでがきれいに拭い去られている。自分の靴音が耳についた。

矢部宏は駅ビルのまえへ出た。足をとめて暗い駅前広場をながめた。ここへおり立ったのは三年ぶりである。矢部の実家はここから支線で一時間ばかり内陸部へ入ったところにある。二、三年に一度くらい、仏事などで矢部は実家へかえっていた。ほとんどの場合、O市は素通りした。友達が何人もいるのに、足をとめなかった。時間に追われていたせいもある。だが、もっと大きな理由がほかにあった。少年時代、矢部はこの街にたくさんの恥をまきちらした。記憶にあるだけでも、ひろいだすと一々背中に鳥肌が立つくらいである。いまこの街へ入ってゆけば、忘れていたいくつかの恥に、こと新しく出会わなければならないだろう。それがわずらわしかった。恐かったといってよい。だから矢部は帰郷のたび、逃げるように支線に乗りかえた。だれにも会わなかった。感慨をこめて街をながめたこともなかった。

こんどはべつだった。この街の記憶にひたって矢部は列車に揺られてきた。駅にとまるたび、記憶はあざやかになった。一駅一駅、過去に向かって運ばれてゆく心地だった。そして、旅の終着駅へ着いたのである。目につくすべての事物に、知らず知らずあのころの痕跡をさがしもとめていた。

駅前広場は闇に沈んでいた。客待ちのタクシーの青いボディの列が、駅ビルの弱いあかりのもとにあった。広場の向うには事務所や食堂や商店の黒い影がうずくまっている。いちばん大きな影も、三階建て程度の大きさである。街灯や窓あかりがならぶだけで、ネオンなどはみあたらなかった。暗いのと、広場から出た大通りがすぐ左折することだけがむかしと変っていない。街灯に照らしだされた大通りの建物は、大きなビルを志して果たせない安っぽい外観のものが多かった。

矢部はタクシーのほうへ歩きだした。目は記憶のなかを向いていた。とつぜん闇の底から大勢の足音がきこえてきた。コンクリートの広場を、おびただしい高下駄の歯がたたく音だった。怒鳴り声が降ってくる。応援団の幹部の号令と演説だった。

「選手はみんな母校のために生命をかけてたたかってきたア。だのにン我ド（おまえたち）の態度はそりゃなんだア。だから勝利の女神は母校に背中向けてしまったんだア」

そりゃア。音頭につづいて歌声がわきおこる。O高の応援歌である。腹を突きだし、天をあおいで下級生たちは高唱する。

遠征からかえった運動部の選手たちを、一般生徒は駅で出迎えなければならなかった。選手たちはたいてい惜敗してかえってきた。応援団の幹部は下級生にあたりちらした。目をつけられると、吊しあげられる。恐怖で皮膚をふるわせながら下級生は声をはりあげた。毎度毎度うんざりした。夏でも駅のあたりには冬の寒気がはりつめていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

矢部はタクシーに乗った。耳のなかの歌声にさからって大きな声で運転手に訊いた。
「×町の森山さんのお宅、わかりますか」
「税理士の森山さんだスな。わかるス」
タクシーは走りだした。歌声が靄のようにぼやけた。
少しいって左へ折れる。家なみがつづいた。むかしあった大きなウナギ屋も旅館も食堂もなくなっている。ほとんどの家が建て替えられて、ツルツルした新建材の家に変っていた。道路の幅は四十年まえとおなじだった。左右を流れる家なみとクルマの距離を漠然と測って、やっと〇市の大通りを走っている実感を呼びおこすことができた。人通りはほとんどなかった。そのわりに、ゆききするクルマは多い。
「森山さん、亡くなったそうだスなあ。今夜はお通夜なんだスべ」
運転手が話しかけてきた。うなずく矢部の顔をミラーでうかがっている。
東京からスか。運転手は訊いた。
大阪から。矢部はこたえた。それだけでは無愛想な気がして、つけ加えた。
「森山とは中学高校で同級生だったんです。いちばん仲がよかった」
運転手は大きくうなずいた。ためらってから、また話しかけてきた。
「自殺だったってスなあ。農薬を飲んだズ話だス。あれは苦しかったべ」
「――――」

「あの人、羽ぶり良がったのになあ。なんして死んだべ。人を七人も八人も使って、このあたりでは名士であったのに」
「人間、五十すぎるといろいろあるからね。めんどうくさくなったんだろう。バカバカしくなったのかもしれない」
「気さくな人だったのになあ。いつも冗談口調でなス。あのかたが死ぬなんてとても考えられねな。成功してるようでも、裏は火の車だったんだスべか」
運転手は四十歳前後にみえた。森山隆之を何度も乗せたことがあるらしい。
O市は人口七万である。おも立った人間を運転手はみんな知っている。沈んだ声で彼はしばらく森山を惜しんだ。
クルマは下町を通りぬけた。長さ百メートルばかりの橋にさしかかった。中学のころよく泳ぎにきた河がそこにあった。杉の美林に覆われた山脈のなかを発し、下流で米代川に合する河である。はるか上流の山影、下流の闇のひろがりに矢部は目をこらした。クルマの窓硝子ごしに夜風を感じた。河原の石や草の匂い、水の匂いが夜風にこもっている。はっきりした一つの思い出がこの橋にはある。
運転手にいって停車してもらった。矢部は欄干に両手をついて河面をながめた。両岸のまばらな民家の灯のほかは、堤防の影がみえるだけだった。厖大な量の暗闇が、足もとからはるか上流まで、河のかたちでしずかに停滞している。暗闇は深く、ひろびろとしていた。どこまでもつづ

いていた。目にあまりにも手応えがないので、しぜんに空をみあげてしまう。星の微光がならんでいた。ほんものの河原の匂いや流れの音が、暗闇の底からのぼってくる。ときおりクルマの走行音があるだけで、橋は深い静寂のなかにうかんでいた。県で二番目の人口をもつ街の夜にしては、しずかすぎるように思われた。

O市の周辺にはいくつかの鉱山町がある。江戸時代まではおもに金銀が、明治以降は銅、亜鉛、鉄などが採掘されてきた。三菱、同和、古河などの大手資本がそれらを傘下におさめていた。O市は各鉱山町の生産、生活物資の供給地として、また消費の拠点として栄えてきた。もう一つ米代川流域の山地の広大な杉林を利用した木材、木工業が、鉱業とならんでこの街の経済の柱だった。矢部の中学、高校時代の同級生のなかにも、鉱山町からかよってくる生徒や、木工所、製材所などの従業員の子弟がたくさんいたものである。

昭和三十年ごろから、資源の枯渇や採算割れで鉱業はおとろえる一方になった。鉱山町は消えたり、ただの村落と化したりした。木材、木工業もやはり資源の枯渇でかつての勢いをなくしている。新しい発展の材料もないらしい。橋の周辺の夜景には、街のそんな現状がにじみ出ているようだった。

それでも河原の匂いや流れの音は、矢部を少年時代につれもどした。四十年まえの現実が矢部の周囲によみがえった。

勝利を告ぐる鬨（とき）の声エ

そりゃあ。

応援団の幹部の一人がそりかえって、夜空に向かって咆哮した。五百名ばかりの下級生はいっせいに腹を突きだし、声をふりしぼってうたいだした。この橋のうえだった。

のどが裂けるほど大声をだす。歌の切れ目ごとにエエだのオオだの声の尾をひかせて、うたわねばならない。最上級の高校三年生たちがまわりに立って、下級生のうたいぶりを睨めつけていた。手をぬくと、なにをされるかわからない。戦後三年たって、上級生の暴力行為は禁止されていた。だが、突発する私刑をだれもとめられるものではない。

「試合に負けてきたのに、なんして勝利を告ぐるなんだ。バカでねえか」

夜空をあおいで矢部宏は文句をいった。

白線帽をかぶり、高下駄をはいていた。O高校併設中学の三年生だった。

「意味わがってねえのしゃ。バカほど音頭とりたがるっていうの、ほんとだな。盆踊りとおなじようなもんだ」

森山隆之がこたえた。闇のなかで、鼻梁の高い立派な顔が笑っている。

敗戦の翌年、矢部たちは旧制O中学へ入った。まもなく学制改革でO中学はO高校に変った。ほとんどの五年生が卒業を一年のばして、O高校の三年生に身分を変えた。

宏たちとその一級上の者たちは、O高校併設中学の生徒ということになった。併設中学は生徒募集をおこなわない。宏たちのO高校進学をもって消滅する予定である。下級生というものが、

だから宏たちにはなかった。二年生になっても三年生になっても、いちばん弱い立場で選手の送迎や応援歌練習にかりだされていた。

「二親(ふたおや)のツラ見てえもんだな。あの連中の。倦(あ)きもしねえでカラ威張りしてしゃ」

「んだ。二親のツラ見てえもんだ」

やめえ。横合から号令がとんだ。合唱がぴたりと停まった。最上級生の一人が宏にせまってくる。クワッ、クワッと高下駄が鳴った。宏は棒になって立ちつくした。憤怒をみなぎらせたその男の顔が、闇を透してはっきりとみえた。

「なにしゃべってら、ン我(が)(おまえ)。まえサでろ。応援歌をなんだと思ってらア」

その男は宏を指した。

宏は顔から血の気がひいていった。背が高いから目立ったのだ。最近急に身長がのびてクラスで三番目になった。

撲られるのは仕方がない。だが、みんなのまえでやられるのがつらかった。ひとりでに足が動いた。宙にうかぶ感じでまえへでていた。全身がこわばり、ひざがふるえる。

いくつかの罵声が宏のまえで爆発した。最上級生が思い思いに怒鳴りつけてきた。撲るならはやくやってもらいたい。ふるえながら待たされるのがいちばん苦しい。

「京文館。ン我(が)もまえサでろ。この野郎、おくれてきたくせに大きだツラしてエ」

うしろで最上級生の声がきこえた。

仲間ができたらしい。宏はすこし気がらくになった。京文館はこの街で最大の文房具店である。そこの息子で同級生の辻島裕平が、やはり槍玉にあげられたのだ。

裕平がまえへでてきた。鼻の大きな、体格のいい男である。泰然としたあるきかただった。だが、ちらと宏をみた小さな目は、悲しみにあふれて闇のなかにならんでいる。連帯の微笑をかわす余裕は二人にはなかった。裕平も棒になってとなりに立ちつくした。

ひとしきり罵声が裕平に集中した。遠征した選手が列車で到着する時刻におくれて、彼は駅へあらわれたらしい。ン我ド（おまえたち）、応援団を舐めてらべ。ぶっ殺して河サぶん投げてけるか。罵声はやがて宏のほうにもふりわけられた。鉄拳と足蹴のまえぶれであるにちがいない。恐怖に塗りこめられて、宏と裕平は立ちつくしていた。

「ようし、ン我ド、一人ずつ交代で音頭とるんだ。まんず京文館からいけエ」

応援団長が大声で命じた。

みんながほっと息をついた。凍りついた闇が融けはじめた。団長の裁定は、三年まえに戦争が終ったことの証拠だった。これが戦時中なら宏と裕平はほんとうに半殺しにされ、ほかの同級生たちも連帯責任のビンタをとられたにちがいないのだ。

裕平は両足をふんばり、天をあおいだ。豪快な姿勢の似合う男だった。上級生に遜色のない蛮声で、歌の最初の一節を怒鳴りあげる。つづいて号令をかけた。

勝利を告ウぐるウ　鬨の声エ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com